

グラデーションサインの表示形態が人の方向指示理解に与える影響

Influence of the gradation sign to the recognition of direction indication.

二本松 亮 (Makoto Nihommatsu) 指導：佐野 友紀

はじめに

現在、一般的に誘導サインは矢印サインが利用されている。矢印サインは目立ちやすく、指し示す方向もわかりやすい。しかし、美術館やデザイン性が高い建物等で、矢印サインを多用した場合、矢印は誘目性が高いため空間環境を損なってしまうことも考えられる。依って、矢印に代わるデザイン性のあるサインとして、色の明度差として、グラデーションを利用した方向指示サインの研究を行った。

研究目的

本研究の目的はグラデーションサインの表示形態が人の方向指示理解に与える影響を明らかにすることである。

研究方法

様々な形態のグラデーションサインを用いて、アンケート調査を2回、実地実験を2回実施した。

(以下 グラデーションを「GD」とする。)

・グラデーションサイン 実地実験 第1回

GDサインが指し示す方向の理解度を明らかにすることを目的に、GD効果で色の変化する方向が異なる8種類のサイン600mm×600mmを作成し(図1)、屋外に垂直方向(1.5mの高さ)に設置。被験者22名(6才女子から70才代男性)に1.5m程度離れた距離からサインを視認してもらいサインが指示する方向について回答を得た。



図1 実験で使ったサイン一覧

・白黒サイン アンケート調査 第1回

白黒サインが指示する方向の理解度を明らかにすることを目的にアンケート調査をおこなった。GDの影響を確認するため、色の段階的変化がないサイン「白黒2色で1/2ずつに塗りわけ作成したサイン」8種類を作成(図2)し、インターネットを通じて、サインが指示する方向についてアンケート調査を実施した。国内外より106名の回答を得た。



図2 アンケート調査で使ったサイン一覧

・グラデーションサインアンケート調査 第2回

実環境を想定した設置形態とサイン形状・GDの影響のアンケート調査を実施した。GD効果とサイン枠の影響を考察するため、3種類の図形「丸形、三角形、四角形」をサインの外枠に使用し、枠内部を無彩色GDで着色したサイン19種類を作成し(図3)、実際の設置場面を想定した写

真を使用したアンケート調査を行った。国内外より吊下げ設置114名、床設置52名の回答を得た。

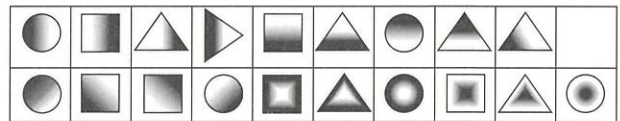


図3 アンケート調査で使ったサイン図

・グラデーション 実地実験 第2回

設置環境とサイン枠とGDの影響について実地実験を行った。第2回アンケート調査で使ったサイン図柄から10図柄を選び、屋外に270mm×270mmのサインを各10サインずつ、吊下げ設置(高さ2.1m)、壁面設置(高さ1.2m)、床面設置し、被験者男女合計15名(10才代から50才代)で実地実験を行った。

結果

アンケート調査、実地実験を通じて、被験者、回答者の多くは、「明るい色へ変化」、「暗い色へ変化」色の変化する方向は異なるもののGDで色の変化する方向をサインが指し示す方向と判断した。白黒サインと比較して、GDを用いた場合、同一の方向を選択し回答する傾向があった。周辺環境を取り入れたアンケート調査、実地実験では、サイン下地色の影響が現れたが、GDで色の変化する方向を、サインが指示する方向として判断することには変わりはなかった。サイン枠とGDの影響では、丸形枠は図形内部のGD効果を妨げなかった。三角形枠では、GDの方向よりも目立つ、尖っている頂点を選択する場合が見られた。(図4、図5)。



図4 吊下げ設置サイン アンケート回答結果 [丸形枠]



図5 床設置サイン アンケート回答結果 [三角形枠]

まとめ

被験者、回答者の多くは「明るい色」もしくは「暗い色」へGDで色の変化する方向をサインが指示する方向と判断する結果となった。現段階では、色の変化する方向を決めてサインが指示する方向として教示を行うことで1方向に導くことは可能であるが、今後、教示を行うことなく、直感で理解できる方向指示サイン方法の検討が求められる。